

## 巨大総肝動脈瘤の1例

◎前田 るりこ<sup>1)</sup>、山本 多美<sup>1)</sup>、尾形 裕里<sup>1)</sup>、大原 未希子<sup>1)</sup>  
社会福祉法人 恩賜財団 済生会熊本病院<sup>1)</sup>

【はじめに】痛みの原因検索目的で実施した超音波検査を契機に発見された巨大総肝動脈瘤を経験したので報告する。

【症例】80歳代、女性。

【既往歴・現病歴】他院で脳動脈瘤の経過観察中であった。X年4月から左乳房下の痛みが持続しているため同年5月、腹部エコー検査および腹部CT検査を施行したところ、腹部動脈瘤が指摘されたので精査加療目的で当院紹介となった。

【入院時現症】身長152cm、体重46kg、血圧167/83mmHg、脈拍67・整、心窓部にNSR 3/10の疼痛あり。

【心臓超音波検査】

左室壁運動異常なし、壁肥厚なし、軽症の大動脈弁逆流あり。

【下肢動脈超音波検査】総肝動脈と連続した腹側に突出した腫瘍像を認めた。内部に拍動性血流の流入がみられ、総肝動脈瘤と判断した。瘤の最大短径は63mm、類円

形で境界明瞭かつ平滑、瘤内部に厚い壁在血栓を伴っていた。血栓は等～高輝度で、内部不均一であった。瘤ネック部は細く、血流は to and fro pattern を呈していた。

【造影CT検査】胃十二指腸動脈分岐部前の総肝動脈に63×69mmの動脈瘤を認めた。

【経過】X年6月、血管造影およびバルーン閉鎖試験を行った結果、塞栓術が可能と判断され同年7月、肝動脈塞栓術が施行された。胃十二指腸動脈起始部と右胃動脈、動脈瘤ネック部、総肝動脈を金属コイルで塞栓し、動脈瘤内への血流は消失した。

【まとめ】診断に超音波検査が有用であった総肝動脈瘤の1例を経験した。自験例は未破裂脳動脈瘤と小さな腎動脈瘤も合併しており、文献的考察も加えて報告する。

【連絡先】済生会熊本病院 中央検査部

096-351-8000（内線2001）